



A Formation of a Medieval Castle Town

千田嘉博

はじめに

- ① 日本中世における城郭集落の形成
- ② ドイツにおける城郭集落の形成
- ③ イギリスにおける城郭集落の形成
- ④ 城郭都市形成の歴史的位



日本中世では13世紀以降に各地で村落形態が集村化していったことが、考古学的に明らかにされている。従来そうした研究は、集落形態に分析の比重があり、城郭との関わりについては分析してこなかった。しかし16世紀にかけた日本の村落の集村化は、多くは城郭を核としたもので、集落プランの凝集に果たした城郭の役割を正しく評価することが必要である。

城郭を核にした集落の凝集（集村化・都市化）は、日本だけのことではない。ヨーロッパ中世においても11世紀を中心に各地で同様の変化が観察できる。最初にこの変化の意義を指摘したトゥーベールは、インカステラメントー城郭都市形成と呼んだ。しかし、こうした集落の変化はアルプス以南に特徴的なものとされ、アルプス以北では重要視していない。こうしたヨーロッパの研究に、現地調査の成果から再検討を加えるとともに、ヨーロッパとの比較によって、日本の城郭集落の特質を捉えるのが目的である。

そこで本稿では、日本での城郭集落形成の分析から、インカステラメントには、村落型と都市型の2形態があることを指摘した。そして、日本では村落型、ついで都市型のインカステラメントを行ったのに対し、ドイツでは都市型に偏し、イギリスでは日本同様の2つの城郭集落形成があったことを明らかにした。ドイツ・イギリスでは土づくりの最終段階である11世紀の城の再評価によって外郭（前城）がもった初源都市としての機能を重視した。こうした検討を通じて、中世の城郭集落の日欧それぞれの特徴と、城郭集落が日欧で共通してもった過渡的で初源的な中世都市としての性格を明らかにした。

日本のこれまでの研究は、村落と都市を区分して検討を進めてきたが、地域における中心地（都市）の形成といった視点から分析をすることで、村と都市を横断的に検討し、両者の関わりの変化をたどり、考古学的成果による地域の中心地形成史を明らかにすることが可能になる。こうした試みは個別都市の復元に留まらない、中世都市研究の新しい視角を提供できると思われる。